① 毎月1回25日発行 第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第19巻 第11号 1974年11月25日 大町山岳博物館

昭和初期の対山館前にそろった登山者たち、「日本アルプス登山御案内」の看板もみえる　百瀬美江氏所蔵

針ノ木展終えて

大町市が昭和四十九年度に実施した文化祭の特別展示は「歴史にみる大町登山口――針ノ木峠――」というテーマで、特に針ノ木峠を中心として、大町が古くから我が国の登山史のうえで果してきた役割について考え、そのことが現在のわれわれにどういう結果をもたらし、今後はこの恵まれた自然環境をどのように生かしながら、自分たちの生活に結びつけていくことが望ましいかを市民に問うための、キャンペーン的性格をも内在した試みであり、またこの機会を通じて「山岳都市」と自他共に誇り得るに足る中味の濃いものにするために必要な山岳関係資料をリストアップしたいという目的もあった。

われわれが山に登り、自然の美しさに魅かれ、その偉大さに驚ろき優しさに包まれる人間の瞬間的情感を、精神的な尊厳にまで昇華させてきた自然と人との係り合いの歴史といったものを追求することによって、過去の伝承的な領域から脱却した科学的分野での解明にまで高めようとする作業でもあった。

こうした過程で大町が登山口として果してきたその役割りの大きさを改めて見直すことになり、あらゆる角度から集められた資料を具体的に整理し、系統だてていくことの必要性は、今までに全く手の入らなかったものだけに関係者の共感を誘っていった。しかし調査活動や資料収集が進めばそれだけに、すでに散失したものも多く、その手がかりさえ把握できない困難な状況に直面する場面もしばしばであった。

山があり、その環境のなかにあって真剣に生きようとしているわれわれだからこそ、この作業を進めるにふさわしいとする方向づけを改めてかみしめながら、ともあれ多くの市民から提供された資料に埋れながら過したこの特別展示の意義は大きく、この趣旨を理解される大方の市民の今後の温かいご協力を願って止まない。（この特別展の調査で明らかにされた内容については、この紙面で紹介されることになる）

（社会教育主事　牛越和男）

大町口登山案内人抄録―その1―

荒井今朝一

ここに紹介する資料は、昭和四十九年度の大町市文化祭に企画展示された「歴史に見る大町登山口―針ノ木峠―」の資料であり、今まで市内あるいは市外の関係者の自宅等に眠っていたものを担当係が、お借りしたり、あるいは複写したものである。ご協力いただいた方々に紙上より厚くお礼申し上げる。

登山口として、また日本最初の案内人組合のできた町として、これらの山案内人に関する資料は今まで散り散りになっていたものである。今回は、それらの資料についてある程度集められるものは集め、当時の生き残りの案内人からも様子をきいて抄録した。

ここでは、その展示の概略と一部の資料等の紹介をしたい。なお、各々の分野についてはそれぞれの担当が後日述べることにする。

一、山案内人の出現

いわゆる山案内人とは、一口で言えば、「登山者の先にたって登山の案内をし、賃金を得る人。」という事になるらしい。一般には、食事、泊り場等の世話はするが、登山者の荷物は持たず、荷物は人夫（ごうりき）（強力）に持たせた。

このような案内人が発生したのは、明治時代中頃、北アルプスを中心とした近代登山の幕開けと同時であった。案内人となったのは、山麓の人間で、目的地の地理に詳しい者、たとえば猟師、釣人、薬草採りなどが、もっぱら副業としたようである。

これとは別に、宗教登山で栄えた富士山、立山、白山等霊峰には、案内人を兼ねた荷物運搬人、「強力」がいた。有名な、富山県芦峅の佐伯平蔵もまたこうした強力の一人であった。彼の名ガイドぶりは、今も「平蔵谷」の名として残っている。

さて、信州側で、案内人を語る時、初期の三人の案内人というよりは、「山人」が考えられる。上条嘉門次、小林喜作、遠山品エ門の三名である。このうち遠山品エ門は、嘉永四年（一八五一）野口村（現在の大町市平野口）に生れた。彼は、「黒部の主」と呼ばれ、狩猟や岩魚釣りに明け暮れる生活のかたわら、営林局から平の小屋の管理を委託されていた。案内は、しなかったようであるが、黒部峡谷に入山したパーティは、ほとんどが、彼の世話になったらしい。百瀬慎太郎も後に、彼と立山に向っている。彼には三人の息子、作十郎、兵三郎、富士弥がおり、息子達は、案内もしたようであるが、作十郎、兵三郎の二人は大正四・五年頃から、ほとんど案内をやめたようである。

この時代は又、探検登山の時代でもあった。各地で現在の山名が、つけられ、三角測量も進んだ。今回、珍らしい白馬山頂の三角櫓の写真を発見入手することができた。

二、山案内人組合の結成

明治時代末から大正にかけて、スポーツ登山の隆盛とともに、多数の人々が、北アルプスを中心とした山々に登るようになる。案内人の数もふえはじめるが、それにともなって、非行に走る案内人もではじめる。そんな折から、大町口登山者の宿を一手にまかなっていた対山館主、百瀬慎太郎は、質の良い案内人の安定供給を考えはじめたようで、彼のこの考えは、日本最初の案内人組合、「大町登山案内者組合」の設立となって結実した。大正六年（一九一七）のことである。新潟県立図書館の御好意によって、結成の際の規約が記載された山岳第十二年号が展示できた。規約は、十八条からなり、設立の主旨、機構、賃金等からなっている。組合は、主任一名、相談役四名、案内人、強力からなっており、大西又吉、勝野玉作等二十二名が、名前を連ねている。いずれも当時一流の案内人達である。同誌は、前文で「吾人は百瀬氏の此挙を満腔の喜びと同情を以って迎ふるものなり」と絶賛している。

このように評価された日本で初の案内人組合であったが、慎太郎自身は、後に新聞に連載した「山岳夜話」の中で、「二十代の一本調子で得意になってはじめたのだが、時の大町警察署長小宮山五九重という人から『誰の許可を得て徒党を組んだのだ。』というおしかりをうけたりして何だか訳の分らない気持がしたものだった。」と述懐している。平林武夫は、この辺にも慎太郎が、役人とか権力ぎらいであった点が、よく表われていると述べている。「山岳夜話」は、書いたのが、終戦まもない頃という事もあって、更には、「今夏あたりから再び盛んになろうとする山登りの気運に向って、（案内人組合も）登山者の為に立直らねばならないと思う。」とも「私は、案内人には、案内人らしい山人のよさが望まれる。」とも述べている。

とにかく、こうして結成された案内人組合は、その後山岳を持つ各地へ波及し、現在では、大町山案内人組合、白馬山案内人組合等全国に、十三組合を数えるに至っている。大町山案内人組合も、その後順調に発展し、今でも十六名の案内人が活躍している。

しかし、当時の大町口の案内人で今も存命しているのは、勝山佐久衛と平林高吉の二人だけである。二人とも八十歳近い高齢にもかかわらず、今でも請われれば山へ行く。今回の展示には、この両名と、昨年、亡くなられ

石川欣一氏と談笑する桜井一雄　桜井家所蔵

た桜井一雄に、貴重な写真、資料等提供していただいた。その中には、桜井と平林が石川欣一氏を案内して針ノ木岳へ登頂した際の写真もみうけられた。又、大町登山案内者組合出身で、後に、有明案内人組合結成を指導した大和由松も忘れられない人物の一人である。彼は大正から昭和初期に活躍した案内人で、当時、めずらしい「スキーのできる案内人」であった。大和由松が当時使用していたザイル、リュック、ピッケル等は御子息の重雄氏より当館へ寄贈いただいた。

岩場もたくみだった大和由松（左）大和重雄氏所蔵

三、案内人と遭難

―大和由松の場合―

大和由松は、明治三十一年（一八九八）当時の北安曇郡平村二ツ屋に生れた。彼は、四人兄弟の三番目で、家は農家であった。農業に従事するかたわら、十七歳頃から山案内を始め、当時結成したばかりだった「大町登山案内者組合」へ加入した。農家の三男という事もあって、その後生家を出て、穂高町有明に移り住み、後には、「有明登山案内人組合」結成の指導的役割を果している。彼は、案内人として一流であったばかりでなく、当時めずらしくスキーが巧みであった。当時流行がスキー登山ということもあって、学生登山家達には、ずいぶん重宝がられたようである。このスキーのできる案内人であったことが、彼の一生の上でも大きな事件である、昭和二年（一九二七）の針ノ木峠の遭難に遭遇する遠因となっている。この際の新聞コピーを長野県立図書館の御好意で入手できたので、それらによって、当時の状況を追ってみたい。

早稲田大学山岳部（正確にはスキー山岳部）は、数ある大学山岳部の中でも慶応大学と並んで大活躍を演じていた。特に冬期は、大沢小屋を中心としてスキー合宿を行ない、昭和二年は、その「第四次大沢小屋生活」を十二月二十五日より針ノ木雪渓で始めていた。リーダー近藤正以下十一名が参加し、十二月二十五日は、対山館に宿泊し、翌二十六日、有明の大和由松、大町の黒岩直吉、勝野玉作ら案内人五人を従えて出発した。途中、中畠小屋に一泊して大沢小屋に入り、二十八日は、荷上げ等をしてスキーは二十九日から始めたようである。これに先だって、スキーができるという事で大和由松のみを残して他の案内人四人は、大町へ帰した。三十日は、午前十時頃大沢小屋を出発した。ところが十一時頃、近藤の「来た！来た！」という叫びと間髪を入れず大雪崩が赤石沢から十一名を飲み込んだ。大型の新雪表層雪崩であった。慎太郎の山岳夜話によると一番先に河津が、次に有田が自力ではいだしその二人がそろって三番目に渡辺を堀り起し、最後に半死の江口を堀りだし七人までは、なんとか助け出したが、家村、関、上原、山本の四名の消息はまったくわからなかった。この時大和は、大沢小屋で昼食の準備をしていたという。近藤が大沢小屋へかけつけ二人でスコップを持って来てみたがどうしようもない。おまけに近藤も含めて七人とも凍症にかかっており体の自由もきかない。そこで再び小屋にとって帰り、近藤と大和の二人は、猛吹雪をついて救助要請のため大町へ向った。この時の近藤の勇気もさることながら、近藤をはげましながら、自から先にたって雪中を走った大和の案内人としてのすぐれた行動力は、高く評価されなければならない。途中、野口の駐在所と大町警察署に連絡して午前三時頃対山館に到着した。この時の事を慎太郎は、「時ならぬというより、何かおののきに似た心持で入口の板戸を開けると雪帽子の頭がヌーッと二つ続いて入ってきた。『静かにして下さい。』かすれた声音である。見ると案内の大和と近藤正である。『何かあったのか？』私は不吉な予感でたずねた。『やられたんです。』わずか数語の裡に、ああ大変な事になってしまったという考えが私の胸をこわばらせた。」と述べている。すぐに弟を起し、二人の報告の大要を聞き取って翌日（三十一日）には、大晦日にもかかわらず、案内人の中でも屈強の者、黒岩直吉外八人の者を集め、救援物資を持たせて送り出している。警察側からは地元消防団をはじめとして多数が捜索に向い、続いて早大からも大島部長をはじめOB等がかけつけ、更に親族も到着した。一月一日より四日までは猛吹雪をついて、必死の捜索が続いた。にもかかわらず四名はついに発見されなかった。四日には、対山館で協議した上捜索は雪解け待ちとして、打切られている。以上がその概略である。

余談になったが、大和はこの後もかなり有名な遭難に出合っている。針ノ木遭難の翌々年の昭和四年のことである。この時、黒田代議士一行を案内して乗鞍岳へ向い、悪天候のため岐阜県側へ迷い込んでしまったらしい。この時は、炭焼小屋を見つけてそこへ避難し、そこで、ずっと行動しないでいたところを発見され、無事帰っている。この頃から大和は「動かずの由松」と言われはじめた。早大の遭難等の教訓もあっただろうが、とにかく天候が悪いと決して無理な行動はせず、慎重を期したらしい。彼は、かなり「がんこ」な性格であったが、経験を行動の中に生かしてゆくことから生れた自信であったのかもしれない。

その後も各大学山岳部等の案内をしながら岩場等の登山技術も磨き、昭和九年（一九二八）には、今西錦司（現岐阜大学長）らとともに京都大学白頭山遠征に加わっている。

戦後も有明案内人組合の発展につくし、七十歳になってもスキーをはき鹿島槍国際スキー場で足をくじくほど元気であったという。そんな彼であったが、昭和四十五年（一九七〇）、前立腺ガンで急逝している。七十二歳であった。

大和由松の生涯は、山案内人が近代的ガイドへ変わってゆく過程を生きてきた一生でもあったといえよう。

（文中敬称は、省略致しました。）

（山岳博物館・学芸員補）

北アの初期登山者と「五万分の一地図」(3)

三井嘉雄

同じく三角点のない奥穂高では、小島烏水が感違いをしている。「私のいふ西穂高岳（現在の奥穂高）へ出ると、ここに、もとは三角測量標があったといふことであるが、今は奥穂高（現在の涸沢岳）の方へ移されたので」（『日本アルプス』）と記している。明治四十四年に穂高―槍縦走の時のことである。

明治四十二年に鵜殿正雄が奥穂高を通ったおりには、「最高峰奥穂高の頂上にも測量杭が立っていて」とあるから、多分標的用の柱が立っていたことと思える。

ところで、測量部員の残した小屋などは、その後、多くの登山者が利用している。

記録に一番よく出てくるのは白馬の頂上の石囲いで、武田久吉が行った明治三十八年には、「この小屋らしい唯一のものも、非常に破損して、屋根のごときも、中心の柱がはずれたため、周囲よりも中央部の方が低くなり、屋根の形を失ってむしろ漏斗のように中央が凹んでいるので」（『明治の山旅』）という小屋を、人夫たちが一日がかりで直している。

冠松次郎の『黒部渓谷』には、「その傍にある測量部の人が四角に積みあげた、天井のない石囲いの中に荷を下ろすと、」というわけで、それを使っているし、槙有恒も明治四十五年に、「白馬は雪渓を登りつめた尾根に陸地測量部員の使ったという石囲いが半ば崩れて残っていた。」（『わたしの山旅』）と記している。

測量部員の使用した石室を利用して、9尺・2間の白馬山頂石室の落成記念　明治末頃

現在はないが、東天井のそばには二の俣の小屋というのがあって、縦走者はそこに泊ることになっていた。明治三十九年に燕から槍に縦走した志村烏嶺によると、「二の俣東天井には参謀本部測量部員の作れる石室あり、大きさ十数人を容るべし。常念、大天井、燕岳附近にありて、雨露を凌ぐに足るは只此石室あるのみ。」となっている。また、大正三年にここを通った荻原繭も、「二俣小屋は、十人を容るるに足る石室であって日本アルプス野営地中第一位にをる。構造に於て、広さに於て」と記録している

4、はじめての「五万分の一」

測量部員の命がけの測量によって五万分の一地図が日の目をみたのであるが、最初の図面にはいくつかの間違った箇所があって、登山者に混乱を起こさせる原因になった。

しかし、その間違った部分というのは、ほとんどが地名（山名）で、違った原因も地域によると呼称の違いによるものが多いから、これは陸地測量部の責任にするのは酷なことでもあろう。

山名で苦労したと思われるものに、大天井岳がある。明治四十五年刊の『神河内』には、「オテンショウ或はテンショウと呼ばれている」とあり、大正四年刊の『中房温泉』には、「おほてんじょう」とルビがつけてあるのだが、それに当てはまる漢字が見つからなかったのである。明治四十年刊の小島烏水の『雲表』には、「二の俣の天照」となっているし、御天上岳という説もある。実際、湯俣川へ流れこむ沢には天上沢となっている。また人によっては、「お天守」であるともいい、結局大天井岳に落ちついたのであろう。三角点名は「天章山」となっている。

明治末頃の白馬尻小屋のスケッチ　千山万岳より

雲の平については、最初の五万分の一の「鎗岳（現在は槍ケ岳）」図幅では「奥の平」となっていて、その後の改訂で雲の平となったのである。これについて大正六年刊の『日本アルプス縦断記』の中で長谷川如是閑は、「我輩は今までこの平原をクモノ平と書いて来た。山岳会及び五万分の一の地図等で雲の平と記してあることを閑却したのではない。」として、この平の雪が消えるとき、その線が蜘蛛の形に見えるので「蜘蛛の平」が本来ではないかと説いている。雲の平は、蜘蛛の平のほかにも、奥の平、岩菅平、大中原とも呼ばれてきているので、むずかしいところである。

（「山と渓谷」通信員）

博物館だより

人事異動　11月6日付で庶務係の内山義章氏が転出。総務課より横沢敏永氏が着任した。

山と博物館第19巻第11号
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町　大糸タイムス印刷部
定価　年額四〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）
九七四年十一月二十五日発行